

第三節 ことわざ

本節のことわざについては、沖永良部島郷土史資料に収められている、玉江末駒・安藤佳翠共編の「沖永良部俚諺集」をそのまま転記した。

序言

沖永良部島は、奄美群島中の南端に位し、与論島を一つ隔てて沖繩島と相接する。面積約六十七平方呎の小島で、現在は和泊、知名の両町、三十有余の大字から成っています。

この島では俚諺をテーキ（和泊地方では、キが口蓋化してテーチ）と言っています。それは民謡の中の、道歌と相並んで、修身齊家の箴言であり、子女教訓の指針でありました。往時は元より今でも活用されているのが数多いことと思います。

ここに収録したのが二百三十余ありますが、これは現地について採集したものではなく、われら兩人がその古い記憶の中から呼び起したものを書き集めたのですし、これに漏れたものが数あるに相違ありません。殊に兩人共和泊町で成長したものであり、且つここ十数年郷里を離れているのですから、島の中の一部に偏した俚諺であるかも知れません。

次にこれらの俚諺を一々見ていかれたならば、それがこの島独自のものではなく、他から伝来したものが多くということに気付かれるでしょう。しかし内地から伝来のものであろうと、はたまた南島共通のものであろうと、俚諺の分布状態を知る上の一資料になりはしますまいか。

島の方言と、いわゆる普通語とは著しい相違があります。俚諺はコトバそのものの研究を対象とするものではないから一見一読誰にもわかる形になおした方が良くはないかとも思いましたが、表現の語感を損うことを惜しみ「普通語に近づけた方言」で記載したのもも相当にあります。

これらの俚諺は部類別にして記載しました。中には適

切でないものもありましょうが、雑然と羅列するよりは便利かと思ひまして、無理にもある部類にはめこんだわけです。

理解をたすけるために解釈をつけておきました。中には耳馴れた俚諺そのままの形のものもあり、強いて拙い解釈を必要としないと思ひましたが、体裁を揃えるため、ひとしく解釈をつけておきました。

昭和二十七年二月二十日

安藤佳翠

一 気象、天候に関するもの

①二月の一日寒さ

旧暦二月（以下何月とあるは何れも旧暦に従う）に入つて、時折真冬を思わせる寒い日があつても二日とは続かない。

②二月風廻や

二月の月は、風位が定まらない。

③二、三月のフチョブクリは瘠枯り牛の種子切りら

しゅん

フチョブクリ東又は北の風の吹きつけること。真冬の候には三寒四温というように、間には暖かい日もあるが、この頃には、東、北の風が十日程も吹き続くことがあるので瘠牛は寒のため斃死することもある。往時牛馬を放牧していたことを物語るものと言えよう。

④梅雨上いに東風の続ちゆぬ時は豆俵の用意しり

梅雨あけの頃に東風が吹き続けば、大豆は豊作である。

⑤人雲の立ちゆぬ時は梅雨の上い

人雲入道雲。又「蘇鉄の花の咲ちゆぬ時は梅雨の上い」とも言う。

⑥十月繩朽た

十月には海が風ぎつづきで、釣糸も朽つ程毎日漁ができる。

⑦十月台風は家倉倒しゅん

この季節外れの台風は、夏季の台風よりも猛烈であると怖れられている。

⑧十月の豆殻北風

十月は秋大豆の収穫時である。この頃に北風が吹くと豆の莢がカラカラとはじけた。それで「豆殻北風」のことがあつた。

⑨冬南風廻いは隣護しんな

冬の季節に風が南へまわるとすぐ雨になるから、近所隣りへも不用心では出掛けるな。

⑩冬雷は夏世界報

世界報は豊作、豊年のこと。冬雷は翌夏の豊年の前兆

⑪冬雨垂には怪物も立たぬ

雨垂は雨おち、軒下のこと。冬の寒さには軒下に立てぬから、早く家の中へ入

れよと招く時などによく言う。

⑫ウリジム北風は雨の根

ウリジムは三、四月、麦の穂の出る季節三、四月頃、北風が吹くと雨になりがちである。

⑬八月の戻り太陽

八月に入つて、再び夏が舞戻つたような暑さに言う。

⑭子丑の尾打振り

子丑（北東）の方角で獣が尾を振るように風が行き戻りする時は天候が陰悪となる。

⑮台風翌日は一人子の船出ちやしゅん

「台風一過」でよく海が風ぎ、安心して旅立たせることができる。

⑯朝焼は雨、夕焼は日照い

朝焼は雨、夕焼は天気になる前兆。

二 倫常に関するもの

(一) 親子兄弟に関するもの

① 親^{ウヤウガ}拜^{ウヤウガ}でいから神^{ウヤウガ}拜^{ウヤウガ}み

親は神よりも尊いと、親孝行を強調したものだ。

② 親^{ウヤウガ}煩^{ウヤウガ}悩^{ウヤウガ}、子^{ウヤウガ}畜^{ウヤウガ}生^{ウヤウガ}

親が子^{ウヤウガ}を思^{ウヤウガ}うほどに子^{ウヤウガ}は親^{ウヤウガ}を思^{ウヤウガ}わない。

③ 親^{ウヤウガ}の罰^{ウヤウガ}は立^{ウヤウガ}ち罰^{ウヤウガ}

親に不^{ウヤウガ}孝^{ウヤウガ}すれば、天^{ウヤウガ}罰^{ウヤウガ}たちまちに降^{ウヤウガ}る。

④ 親^{ウヤウガ}の鳥^{ウヤウガ}ど子^{ウヤウガ}育^{ウヤウガ}てゆ^{ウヤウガ}る

親^{ウヤウガ}鳥^{ウヤウガ}がガアガア鳴^{ウヤウガ}き立^{ウヤウガ}てるように、懸^{ウヤウガ}命^{ウヤウガ}にならねば子^{ウヤウガ}の養^{ウヤウガ}育^{ウヤウガ}はできぬ。

⑤ 魂^{ウヤウガ}添^{ウヤウガ}えては子^{ウヤウガ}は産^{ウヤウガ}さ^{ウヤウガ}らぬ

思^{ウヤウガ}慮^{ウヤウガ}才^{ウヤウガ}覚^{ウヤウガ}すべてが備^{ウヤウガ}わるように、子^{ウヤウガ}供^{ウヤウガ}は産^{ウヤウガ}めなから自^{ウヤウガ}分^{ウヤウガ}で磨^{ウヤウガ}けよと。なほ、この上に「親^{ウヤウガ}は産^{ウヤウガ}し

ど産^{ウヤウガ}さ^{ウヤウガ}ゆる」を添^{ウヤウガ}えても用^{ウヤウガ}いらる。

⑥ 可^{ウヤウガ}愛^{ウヤウガ}し^{ウヤウガ}やる子^{ウヤウガ}は鬼^{ウヤウガ}に採^{ウヤウガ}まし

可^{ウヤウガ}愛^{ウヤウガ}いからとて子^{ウヤウガ}供^{ウヤウガ}は甘^{ウヤウガ}く育^{ウヤウガ}てるな。

⑦ 齡^{ウヤウガ}とつてからは親^{ウヤウガ}敬^{ウヤウガ}め子^{ウヤウガ}敬^{ウヤウガ}め

老^{ウヤウガ}いては子^{ウヤウガ}に従^{ウヤウガ}へで、子^{ウヤウガ}供^{ウヤウガ}の意^{ウヤウガ}見^{ウヤウガ}も尊^{ウヤウガ}重^{ウヤウガ}せよ。

⑧ 倒^{ウヤウガ}り馬^{ウヤウガ}から走^{ウヤウガ}り馬^{ウヤウガ}

「鳶^{ウヤウガ}が鷹^{ウヤウガ}を生^{ウヤウガ}む」と同じ。

⑨ 親^{ウヤウガ}の言^{ウヤウガ}うこと聞^{ウヤウガ}かぬ子^{ウヤウガ}は蛙^{ウヤウガ}になゆん

親^{ウヤウガ}のい^{ウヤウガ}ましめを良^{ウヤウガ}く守^{ウヤウガ}れ、と。

⑩ 兄^{ウヤウガ}弟^{ウヤウガ}は他^{ウヤウガ}人^{ウヤウガ}の始^{ウヤウガ}まい

兄^{ウヤウガ}弟^{ウヤウガ}となれば、その親^{ウヤウガ}し^{ウヤウガ}み^{ウヤウガ}が薄^{ウヤウガ}くなる。

⑪ ウナイ神^{ウヤウガ}はマササ

ウナイ^{ウヤウガ}女^{ウヤウガ}の姉^{ウヤウガ}妹^{ウヤウガ}、尊^{ウヤウガ}んで「ウナイ神^{ウヤウガ}」と称^{ウヤウガ}する。マササ^{ウヤウガ}神^{ウヤウガ}様^{ウヤウガ}の現^{ウヤウガ}わす「効^{ウヤウガ}験^{ウヤウガ}」に当^{ウヤウガ}る語^{ウヤウガ}か？

が立^{ウヤウガ}つ。

④ 男^{ウヤウガ}の年^{ウヤウガ}老^{ウヤウガ}は甕^{ウヤウガ}の破^{ウヤウガ}れ、女^{ウヤウガ}の年^{ウヤウガ}老^{ウヤウガ}は鍋^{ウヤウガ}の破^{ウヤウガ}れ

鍋^{ウヤウガ}の破^{ウヤウガ}れ物^{ウヤウガ}は何^{ウヤウガ}とか役^{ウヤウガ}立^{ウヤウガ}つが、カメ^{ウヤウガ}の破^{ウヤウガ}れは何^{ウヤウガ}にも役^{ウヤウガ}立^{ウヤウガ}たぬ。老^{ウヤウガ}いても女^{ウヤウガ}は男^{ウヤウガ}より役^{ウヤウガ}立^{ウヤウガ}つ。

⑤ 糖^{ウヤウガ}屋^{ウヤウガ}の隅^{ウヤウガ}忘^{ウヤウガ}りるな

富^{ウヤウガ}貴^{ウヤウガ}な身^{ウヤウガ}分^{ウヤウガ}になつても昔^{ウヤウガ}の貧^{ウヤウガ}乏^{ウヤウガ}した時^{ウヤウガ}のことを忘^{ウヤウガ}れるな。又「槽^{ウヤウガ}糠^{ウヤウガ}の妻^{ウヤウガ}を大^{ウヤウガ}切^{ウヤウガ}にせよ」との意^{ウヤウガ}にも用^{ウヤウガ}いられる。

⑥ 新^{ウヤウガ}嫁^{ウヤウガ}の三^{ウヤウガ}日^{ウヤウガ}働^{ウヤウガ}き

花^{ウヤウガ}嫁^{ウヤウガ}の当^{ウヤウガ}座^{ウヤウガ}は、か^{ウヤウガ}い^{ウヤウガ}が^{ウヤウガ}い^{ウヤウガ}しく働^{ウヤウガ}くが、後^{ウヤウガ}は本^{ウヤウガ}性^{ウヤウガ}をあらわす。

⑦ 夫^{ウヤウガ}婦^{ウヤウガ}喧^{ウヤウガ}嘩^{ウヤウガ}は犬^{ウヤウガ}猫^{ウヤウガ}も食^{ウヤウガ}まぬ

夫^{ウヤウガ}婦^{ウヤウガ}喧^{ウヤウガ}嘩^{ウヤウガ}の^{ウヤウガ}見^{ウヤウガ}にく^{ウヤウガ}き、ば^{ウヤウガ}か^{ウヤウガ}ば^{ウヤウガ}か^{ウヤウガ}し^{ウヤウガ}さ。

⑧ 姪^{ウヤウガ}子^{ウヤウガ}の^{ウヤウガ}う^{ウヤウガ}ち、嫁^{ウヤウガ}な^{ウヤウガ}さ^{ウヤウガ}ぬ^{ウヤウガ}う^{ウヤウガ}ち^{ウヤウガ}今^{ウヤウガ}一^{ウヤウガ}度^{ウヤウガ}見^{ウヤウガ}てお^{ウヤウガ}け^{ウヤウガ}ば^{ウヤウガ}良^{ウヤウガ}か^{ウヤウガ}つ^{ウヤウガ}た^{ウヤウガ}も^{ウヤウガ}ん

(二) 夫婦、男女に関するもの

① 似^{ウヤウガ}合^{ウヤウガ}てど寵^{ウヤウガ}し^{ウヤウガ}き^{ウヤウガ}ら^{ウヤウガ}ゆ^{ウヤウガ}る

寵^{ウヤウガ}し^{ウヤウガ}き^{ウヤウガ}る^{ウヤウガ}生^{ウヤウガ}計^{ウヤウガ}を立^{ウヤウガ}て^{ウヤウガ}い^{ウヤウガ}く^{ウヤウガ}こ^{ウヤウガ}と。

「似^{ウヤウガ}た^{ウヤウガ}者^{ウヤウガ}夫^{ウヤウガ}婦^{ウヤウガ}」の意^{ウヤウガ}

② 雌^{ウヤウガ}鶏^{ウヤウガ}の歌^{ウヤウガ}ゆ^{ウヤウガ}しは家^{ウヤウガ}の疲^{ウヤウガ}弊^{ウヤウガ}

「雌^{ウヤウガ}鶏^{ウヤウガ}の^{ウヤウガ}晨^{ウヤウガ}」と^{ウヤウガ}同^{ウヤウガ}じ^{ウヤウガ}く、^{ウヤウガ}媼^{ウヤウガ}天^{ウヤウガ}下^{ウヤウガ}を^{ウヤウガ}い^{ウヤウガ}ま^{ウヤウガ}し^{ウヤウガ}め^{ウヤウガ}た^{ウヤウガ}も^{ウヤウガ}の^{ウヤウガ}。

③ 女^{ウヤウガ}と綱^{ウヤウガ}切^{ウヤウガ}りに余^{ウヤウガ}りは無^{ウヤウガ}ん

「女^{ウヤウガ}に余^{ウヤウガ}り^{ウヤウガ}は^{ウヤウガ}無^{ウヤウガ}い^{ウヤウガ}」で、女^{ウヤウガ}は^{ウヤウガ}何^{ウヤウガ}と^{ウヤウガ}か^{ウヤウガ}生^{ウヤウガ}き^{ウヤウガ}て^{ウヤウガ}行^{ウヤウガ}く^{ウヤウガ}途^{ウヤウガ}

可愛かった姪子も、わが家の嫁にとってみれば、憎いものだ。

⑨ 倅気は人為め

倅気をすれば、仇し女との仲を裂くどころか、却って逆効果を生じ、兩人の情交を密にすることとなる。

⑩ 男は舟締め、女は家締め

船頭が手狭な舟の中をきちんと整頓するように女は家の中を整理整頓するが肝要だとの教え。

⑪ ユケ女は七竈の飯焚ちゆん

ユケ女は七竈の飯焚ちゆん、ユケ女は七竈の飯云々、一どきに多くの台所仕事をやってのける意

⑫ 夫婦の仲は一束間に切りゆん

夫婦の仲は束の間にも断れて、あかの他人となることがある。これは「親子の仲は、切っても切れぬ」を対象して言うこと。

⑬ 侮ぐ者に手噛まゆん

馬鹿にしていた者が出世して、自分が面目を失うこと。

⑭ 志は蕚の葉

つまらない品物でも、親切がこもっていれば有難い。

⑮ 挨拶に銭金は要らん

人には愛想よくせよ

⑯ 可愛しやど旨ま

仲よしの者同志寄って食べば、何でもおいしい。

⑰ 玉黄金為りは吾身も玉黄金

他人を大事にすれば、吾が身も他人から大事にされる。

⑱ 今日人は人の上、明日は自分の上

⑬ 女の魂は額の先
女の思慮の浅いことを言う。

(三) 一般世間に関するもの

① 遠さぬ親類よか近さぬ他人
遠方の親類よりも、近所に居る他人が頼りになる。

② 自分抓み

わが身にひきあてて、他人を思いやれ

③ 人の先と世の先とは分からぬ

人の上、世の先、将来のことは卜せられない。

④ 今日有てい、明日有むでい思うな

今日は今日で、明日のことを今日知る事はできない。

⑤ 柩の蓋、被るまで人侮ぐな

棺を蓋うまでは人を侮ってはならぬ

禍難は他人事ではなく、自分にもふりかかると思え。

⑫ 向こて来る犬の面打つな

犬猫が嫌いでも、自分に寄りついてくる時は、打叩きするものではない。まして、人においておやで、たとへ嫌いな者でも、来る早々どやしつければ其の者の恨みを受けることになるぞ。との戒。

⑬ 尋ある身体、他所に持たれ

五尺の身体、人との附合いを良くすれば、すべての人から愛せられることになる。

⑭ 他人の果報と吾果報

界報はクアホウの略。しあわせ世は相持ち、他人の幸せがめぐりめぐって、わが幸せとなる。

(四) 言行に関するもの

① 短気は損気

短気を起すな、禍の基。「短気の出ぢゆんきや手引き」も同じ。

② 慾の熊鷹、股張い裂ちゆん
貪慾は、身を滅す。

③ 満たぬ瓶と鳴ゆる
未熟の者こそ、得て自惚れ高ぶる。

④ 平蝸牛の高昇い
卑賤から出世したものは、得て威張りたがる。

⑤ ホーミの位下い
ホーミ＝魚の名。形は美しいが、臭味があつて好
かれない。見掛倒しで中味のないもの。

⑥ 怠者の糞働き
怠け者はコツコツ働くことはせずに、せつぱ結つ
てから、がむしやらに働こうとする。
「イチブイ者の杵替や」というのもある。

有るからといって自慢するな、無いからといって
憂えるな。

⑬ 富人に持ち切り無ん、貧素に持ち切り無ん
前の諺を裏返しに言ったもの。

⑭ 捨てる神のありは引上ぎゆる神の有ん
捨てる神があれば、助ける神がある。

⑮ 蟻の思いも天道たね届ちゆん
小さい者の願いでも、誠は天に通ずる。

⑯ 天道様は近さ
天の神様は、遠い彼方にいますのではなく、我々の
身辺にあつて、善悪のすべてを照覽しておられ
る。

⑰ 急がばまわり
急げば事を仕損ずる

⑦ 歩く者ど糞踏みる
家を外にして出歩いている者は、ろくなことはし
ない。

⑧ 虚言は先ち通らぬ
うそいつわりは、きつとバレる時がくる。

⑨ 鼻の開きは、尻も開らちゆん
鼻を開く＝鼻を動かす。自慢すること。自慢をし
て有頂天になれば、腹の貯えが下へ漏つていくよ
うに後には何も残らぬようになる。

⑩ 鼻高天狗
自慢をする者

⑪ 千人が股潜るとも一人が頭越いるな
人を凌ぐな、謙遜であれ

⑫ 有んとにち吹かすな、無んとにち愁ぶな

⑬ 研がなしゆてい鍛冶屋恨みるな
刃物は研いで使え、又自己研讀の訓へ

⑭ 木の曲いは使らゆしが人の曲いは使ららん
性根の曲つた人間は手に負えない。

⑮ 百足の転び
「猿も木から落ちる」で達人も仕損じが無いでは
ないぞ。

⑯ 馬牛は力、人間は魂
人間は腕力のみではいかん。智慧を働かせ。

⑰ 虎の口には附くとも人の口には乗らん
うかうかと人の口につてだまされるな。

⑱ 初めの辛さ、後の甘さ
約束事は、最初に固く結んで、後で悶着の起らぬ
ように。

②4 大取フイトクい為シるよクか小取コトクい為シり
「濡手ヌテに粟アヲ」を夢見ユメミずニ小を積ツキんで大とするよシう
に。

②5 盃サイの水も岳タケの水起シしゆん
木の葉ハの下ノをくぐる盃サイほどの水もやがては山から
下スる大水オホノミヅとなる。大事オホジの前の小事コトノジを慎シめ。

②6 盗人ヌスドクの間マは十間ジュウケンぞ
一寸イチセンの隙間クシマでも盗人ヌスドクからは十の隙間クシマが見ミえる。油
断ツツは禁物キンモノ。

②7 家習ヤナヒナれどティン習チンナヒれ
ティンテインン||「天テン」で「世間セケン」の意。「天テンの下ノ」と
も言イう。家庭ケイテイでの躰タテマけが世間セケンに出デても役立ヤクダテつ。
「家習ヤナヒナれどう人習チユウナれ」とも言イう。

②8 見習ミナヒナれ、聞き習キキナヒれ
見聞ミコトきして、自分ジブンの知能チノウを磨シけ。

られぬものである。

③3 物は相談モノワザワザ

事コトの成ナるか成ナらぬか、独ヒトりで案アヒするよりも相談ワザワザに
乗ノり出デすこと。

③4 相談ソウダンじりは半ナカら

他人タニと相談ワザワザして、その智慧チエを借カりれば事コトの半分ハーフは
成就チウジウしたよシうなもの、という意イか。

③5 年寄トウシユイとは穴掘アナウヅって相談ソウダンじり

穴掘アナウヅって||これは次ツギの伝説デンゼツに基キくものかと思オモう。
昔ムカシある国クニで「老人ロウジンは山ヤマに捨スてよ」との掟オウジがああつた。
ところが一人ヒトの孝子コウシは老母ロウボを捨スてるのに忍シびない
ので床下トコノカに穴アナを掘ウって隠カしておおいた。その頃キタマたま
たま隣国リンクニから国クニの安危アノイにかかわる三ミつの難題ナンダヒが持
ち込まれた。王オウは案アヒじわわずららつた挙句キウ「この難題ナンダヒ
を解トく者モノには褒美ホウビをつかつかわす」との布令フレイだ。そこで
件ケンの孝子コウシは穴アナの中ナカの母ハハに尋ねるとわけなく解トいた
ので、直ナに王オウに申マし上ウげたら感賞カンショウがあり、それか

②9 良人リョウジン探サグめて潮戯ハナゲリ為シり
冗談ジョウタン事コトでも、相手アライをみミてししないと、ひどい目メに合あ
うぞ。

③0 肝カンし容姿ヨウサ買カうゆん
肝カン||「むら肝カン」のこころ。
「肝カンこころ」ともいいう。

容姿ヨウサは醜みにくくても、美しい心ココロの持主モチヌであれば、それ
を補トつて余あまりがある。

③1 三人寄ミチヤイヨ合アうて人事チユウジトウ言イんな

三人寄ミチヤイヨつて他人タニの悪口アククチを言イうと、三人ミチヤイヨの中には必カナラ
ずや悪口アククチを言イわれた者の縁故エンコ者がああつて、相手アライに
通トずる。

③2 他人事チユウジトウ言イいガンテ生米ナアマミ噛カみガンテ

ガンテ||その事コトに夢中ムチュウになる意イか、或あるは熱中ネツチュウする
ことか。

生米ナアマミを噛カみ出デすといいつまでも止とめられられない。それ
と同じく、他人タニの噂話ウザバタもやり出デすと面白オモシくくてやめ

らはこの掟オウジを廢ヘし、改カめて老人ロウジンを大切オモシにするよシう
にななつたと。

③6 物言モノイハ読みしやは長柄橋ナガテハシに積ツキまゆん

物言モノイハ読みしやは||おしやべり者モノイハ
長柄橋ナガテハシ||大阪オサカの毛馬モウマにある橋ハシであろう。これにつ
いての伝説||確タシかでないが、大体おおよそ次のよようではな
いかと思オモう。

昔ムカシ、河カハの堤防ツツツ(或あるは橋梁ハシライか)の構築コウキツに当あたつて、
人柱ヒトウチを立てることにななつた。その人柱ヒトウチに立たてる者
は「横切ヨコキれ縫ヌの着物キモノを着きている者モノ」というこことだだつ
た。すると一人ヒトの娘ムスメが「自分ジブンが横切ヨコキれで縫ヌつた着
物キモノを着きている」と言いつたため、とうとう人柱ヒトウチに立た
てられたといいうのである。話ワタシは少し曖昧アモイな点トチもあ
るが、兎角ウサカ今イマでも横切ヨコキれで着物キモノのふせをするもの
ではないと戒いましめめられていいる。津ツの国クニの長柄ナガテの橋ハシは
弘仁年間コウニノミヤウチ(西紀八〇〇年頃)に構築コウキツされ、この架
橋カキハシには困難クワンナンを極たぎめ、人柱ヒトウチの伝説デンゼツ長く後人コトノヒトを痛いたまし、
「物言モノイハはじ父チチは長柄ナガテの人柱ヒトウチ、雉トリも鳴なかかずば撃うれま
いものを」といいう歌ウタもああつて、全国クニノミチ―鹿児島地方カゴシマノチ

にもあるようである。人柱を立てる河川もない島にまでこれが伝わってきている。

③⑦ 赤牛為んな。又は「赤牛の目為んな」

子供は大人の前で、要らぬ事をしゃべるものではないという戒である。これには次のような伝説がある。

藩政時代には耕作用の畜牛を屠殺する者は重罪に処せられることになっていった。時に一人の男が、赤毛の牛を盗んできて夜中にこっそりこれを屠つて食べた。このことは、子供にも固く口止めしてあったのであるが、役人が取調べに来た時、親父のそばにいた子供がまさに事実を言い出しそうな顔をした。そこで親父が目を光らしてギョツと睨みつけた。この陰幕に「親父が目は、この間殺ちやぬ赤牛の目ン玉のごと恐るしや」と言ったので、とうとう悪事がバレて処刑されたというのである。人が恐った目をした時「牛盗人目為い」というのもこの伝え話から来ているであろう。

② 上ち水は立ていららん

高い所へは水は引かれない。上様の命はただこれに従う外はない。

③ 公儀は広さ

公儀に与かる者は、広い世間相手である。ちよつとやそつとは目こぼしもあろう。それで馬鹿正直に一々下知を守らずとも要領よくやっておれば何とかなるものだとの意。

④ 医者と横目の跡は立たぬ

横目＝藩政時代の役職、刑罰を司る。医者は菓九層倍するためか。横目は兎角人の恨みを受けがちであるためであろう。その子孫は栄えないというのである。

③⑧ 鳥は口に憎まゆん

鳥のように口数の多い者は、人から憎まれる。「人喰い鳥」というのも、饒舌の者を怖れ憎んで言う。

③⑨ 学者の空講釈

実行の伴はない、空理空論は何の役にも立たない。

④⑩ 諺に空諺は無ん

昔の人の教えに無駄なものは一つもない。

④⑪ 火起の穴から天道見ゆん

火起し＝火吹き竹。見聞のせまいこと。

三 世態、人情に関するもの

① 公儀敬め

公儀の下知は事の善悪を問わず、命ただこれに従うのみである。それで真似ごとでもして、その責を果たさねばならぬ。乃ち精神のこもらない、た

⑤ 狂れ者の跡は立ちゆしが魂利きの跡は立たぬ

狂れ者＝ここでは魯鈍な者の意。フリムンは人の恨みを買うことも仕出かさないから跡は栄えるが、才走った者は人をペテンにかけることもあるうし、それでその跡は栄えないというのである。

⑥ ぬされらぬ果報はちかまらぬ

ぬされる＝幸を得ること。恵のさずかること。運がめぐってこなければ、いくら焦っても幸福は得られない。

⑦ 命果報と世果報

「命あつての物種子」で、命があればめでたい世の中にもめぐりあう。

⑧ 鞍掛馬に乗ゆん

難儀苦勞もせずして、待ち設けた福にありつく。

⑨ 待つ者の大喜び

「福は寝て待て」と同じ。

⑩ 附く者ど可愛しや

馴附いてくる者程可愛がられる。親子の間柄でもいえる。

⑪ 泣ちゆる子ど乳飲みる

黙っていては、誰も構ってはくれない。病氣災難の時でも。

⑫ 泣ちさ者の面にはトウドウ虫の縫ゆん

トウドウ虫＝ヤスデ

悲境に落ちこんだからといって、ふさぎ込んでしまえばますます憂き目を見るばかりである。

⑬ 腐り物にど蠅はちちゆる

見苦しいことが起れば、それが四方に糸をひいて次々にいやなことが続く。

⑭ 借いグイは有しが戻しグイは無ん

札を言って借りはしたものの、貰ったつもりで返そうとはしない。

⑮ 借ゆぬ時は仏、戻しゆぬ時は鬼

「借る時の恵比須顔、返す時の閻魔顔」に同じ。

⑯ 慇懃狡っぼ

お世辞の巧みな者は得てして狡いことをする。

「インギン無礼」ともいう。

⑰ 目八丁、口八丁

「目八丁、口八丁」を「目八丁」というようである。

⑱ 川の大姉

猿蟹物語に似た物語。籠の底には青い未熟な桃を入れその口の所に僅かばかり熟した桃を入れてやったという物語からきているのであるが、表ばかり美しく、見栄えがして中味の乏しい贈物。

⑲ 大人は思ての欲しや童は見ちの欲しや

大人は数々の美味を思い出して食欲がそそられる。子供は目の前に見せつけられると、手を出さずにはおられない。

⑳ 生恥は隠さゆしが死恥は隠さらぬ

平常はどんな暮しをしていようと、他人が一々見ているのではないが、死人がある時は葬儀万端人任せになるから、生計の様子がそのまま人前にさらけ出されることとなる。

㉑ 葬式戻いの医者話

死んでから「あの医者にかかれればよかった」などと返らぬ愚知をいう。

㉒ 足の動きば口も動ちゆん

外を出歩けば、どこかで食べ物、飲み物にありつける。

㉓ 脚病みは瘡して手病みは肥えゆん

㉔ 医者の不養生

人には保健衛生を説き、治療に従事しながら、自分の体は粗末にする。

㉕ 家ハジャガイ世間猫子

「内弁慶の外すぼみ」、自分の家では暴れまわるのに、他所の家へ行くと猫のように畏まる。又「家ハジャガイ……」ともいう。

㉖ 章魚の色戻い

章魚が色を変えるように、喜怒がたちまちにして顔色にあらわれる。

㉗ 肝ど物見ゆる

「心ここにあらざれば見れども見えず」の意。

㉘ 噂しりは立ちゆん

「噂をすれば影が立つ」と同じ

の占いよりも却って筈に当ることが多い。

㉙ 針の穴通しゆんがね

がねミトク古語の「がに」に当る。「…の如くに」の意

㉚ 医者ウチナの医者ウチナ嫉妬 ユタのユタ嫉妬

ウアーナイウチナ古語「うはなり」、ねたみ、そねむこと。

僅かなことも一々干渉せねば気が済まぬこと。

医者、ユタ共に同業互いに嫉んで、仲の良くないこと。

㉛ 夢ユメは原ハル々の草の裏葉

夢は野原の草同然のものであるから、悪い夢を見たといつて気にする必要はない。これは民謡「夢見ちゃむでいち夢の沙汰為るな」の下の句。

㉜ 機嫌長者

日によつて、愛憎好悪があり、機嫌のとりにくい者。

㉝ 馬鹿バカに付きゆる葉は無ん

「馬鹿につける葉は無ん」そのまま

㉞ オウオウに物破りは無ん

オウオウ長上に対する受け答え「はい」の意。何事でも「はい、はい」と聞いておれば、万事争いはない。

㉟ 大原オハルは大ユタ

大原オハル大野原であるが、ここでは広い世間の意。ユタユタ福禍を占う者、多くは女巫女にあたる。広い世間に出て、衆人の言うことを聞けば、ユタ

㊱ 銭金ゼンキンの出ぢりは親類も出ぢゆん

金が出たと見れば、親類呼ばわりする者が続々と出てくる。

㊲ 米コメの側ソバには居ウらゆしが、甘藷ウツムの隣ナリには居ウららん

隣で米の飯を食っているのを見ては、さして食指は動かぬが、イモを見ると欲しくてたまらない。と、実際とは矛盾しているように思うが、島の人のイモに対する執着を極端に表したものと見えよう。また実際イモを一日食わずに居ると欲しくてたまらない。という人もある位だから。

こそ銭持ちである。衣裳持ちも亦同様

㊳ 無ムぬ袖スエは振フらん

無いものはないで、いくら思つても願つても、かなわぬ。

㊴ 食カましゆしど我がお主シユ

「食を与ふるこれ我が主なり」で生活の前には、恥も体面もない。自分に食を与えてくれる者のみを主人として仰ぐというのは、あさましいことではあるが、シマの生活苦のいつわらない告白である。この俚諺は、沖繩、大島共通のものだろうと思う。「物、呉クゆしいど我がお主シユ」(沖繩)がある。

㊵ 仏ブツの真似マネはできゆしが富者オイチユの真似マネはできらん

富者の裕福な生活を羨んで言ったもの。

㊶ 大鳥オトコライの飛トびば羽根ハネの落ウていゆん

大きな世帯を構えていた者が他へ去つてしまうと何か後におちこぼれが残つて、居残る者は恵にありつく。

㊷ 灰吹ハイフキきと金持カネモチは溜ヒるほど穢キタナさ

守銭奴は、金が殖えれば殖えるほど根性がきたなくなる。

㊸ 銭持ゼンチちには銭ゼン呉クれれ、衣裳持イサモチちには衣裳イサ呉クれれ

一見奇のようであるが、銭持ゼンチちは銭を愛するから